

## 讀者より

### 始めて幼児の友

となりて

(保育實習生感想手記)

#### A 子

昭和八年四月十一日、此の日こそ永久に記念すべき日だと思ひます。始めて幼な兒の園の門までたぎりついた其の日なのですね。

私の様な者をも子供は先生と呼んで呉れました。珍らしさも手傳つてたでせうが、心から私の友達になつてくれました。中でもTちゃん——泣蟲であるだけに餘計に私と仲好しのお友達になりました。四月中はさうしても一泣

きしなければお部屋の中に入る事が出来ません。さうしても入るのが嫌な時、たつた二人きりで誰も居ないお庭の二り臺に腰かけて靜かにお話する日もありました。そんな時なごほんごに私はうれいでした。まるでTちゃんの母である様なつもりになつてしまつて、この子の氣持をさうかして眞直に素直に伸して行きたいと日夜願つて居た私でした。けれどTちゃんはやつぱり直りません。十日たつても二十日たつても、矢張りみんなの中でお話を聴く事も出来ませんし遊ぶ事も嫌なのです。或日の事又泣いて／＼さうしても會集の所へ入つて行くのを嫌がるので、又二人は取残されてお庭に居ました。何時もそうした時に坐る二り臺の下に黙つて座つてゐました。何も言ふ事はなのです、黙つて。もう泣き止んだTちゃんは何か夢見るやうな目付きで一時間程先の土を眺めて居ます。私はそのTちゃんの様子を見つめてゐました。

ふと私を見上げるTちゃん、目がかつちと合つた途端、何ごはなしに二人は微笑みました。軽い瞬間的の淡いほゝゑみ、けれど何かしら心の底に溫いものがさつと流れた様な氣がして、思はずはつとせすにはゐられませんでした。「Tちゃんお話してあげようか。お話を」。又いつもの癖で「もうえ」言ふと思ひの外「ふん」さうなづくのです。「カチ／＼山のお話をしてあげませうね」

「昔むかし、おじいさんとおばあさんが居たのですよ……」

まあTちゃんの顔、今まで浮かない顔をして居たものが、顔一ぱいにひろがるよろこびの色、涙の一杯たまつた眼は嬉しさうに輝いてゐる。私もぐつと胸につき上げて來るうれしさを感じた。

「ねえTちゃん、あのお部屋の中に入つたら、こんな面白いお話が澤山聽か

れるよ、入りませうよ」話し終つた私は斯う言つた。Tちゃんとは興奮からさめてホッとした様子上氣した頬をして「入る」ミだつた一言「そう、は入つてくれる？皆さ一しよにお話を伺ふのね」私もあまりの嬉しさに夢中になつてTちゃんを抱き上げてお部屋に入つた。

もうお歌の時間は済んでリズムが始まつてゐた。それを見たTちゃんは、私の腕からすべり下りる様にして皆の輪の中に飛込んで行つた。そして同じ様に竝んで歩いてゐる。あゝあの元氣な潑刺な幼児が今までのTちゃんなのか。あの愉快げにマーチしてゐる子か、つい先刻まであの泣いて友達嫌ひだつたTちゃんなのか。ミう／＼こゝまで来てくれたのか、こうして一しよにリズムが出来るまでに小さい心が素直になつてくれたのか。私の前を手を振り頭を振りにこ／＼マーチして行く元氣Tちゃん姿を見たら、あまりの嬉

しさにこらへきれず感謝の涙が頬を傳つた。子供の前で涙を見せてはいけなはいさは思ひつゝも、こらへる事が出来ない。

「有難う、Tちゃん有難う」母にも似た、いゝえ母にも増した喜びに、心の中でひたすら感謝しつゞけた。

その翌朝の事、私が幼稚園さして道を急いでゐた。もう幼稚園の門が見える、赤い煉瓦の門が、あつ誰か居る、Tちゃんだ！／＼向ふでも私の姿が見えたらしい一目散に走つて来る。いゝのよ、そんなに走りなくても、今にそこへ行くわ、まあそんなに走るさこけるわよう。

「先生、僕ね、今日もお部屋に入つて兵隊さんみたいに上手に歩くわよ。みんなさ一しよに」。

あゝTちゃん、あなたは私の氣持がすつかりわかつてくれたのね。口には出さねき心の中で叫びつゝ、仲好く手をつないで幼稚園へ。一言も明日から

皆さ一しよにお仕事しませうねとは言ひきかせもしなかつたのに、あの子は私の氣持をすつかり知つて居るのだ。この私の心からなる願を言はず語らずの中に感じてくれたのだ。心の交流、さうだ、心と心の結びつき、その成果としてこの結果が生れて來たのであらう。

「今日も元氣で皆さ一しよにお仕事するの」

此の一言を聞きたい爲に十數日努力し、善き友眞の友たらんが爲に苦心して來た私であり、この一言を云ふ爲に早くから私の來るのを門に立つて待つて居たTちゃんなのである。

幼児こそ私の生命、全生活の目標なのである。今はもう、それを疑ふ餘地は寸分ない。幼児あるが故に、私もある。幼児の生活がそのまゝ私の生活であり、私の生活は幼児の存在によつて維持されて居ると言つても過言ではない。

## B 子

「幼児の友なる」それは私が女學校時代、否それよりもすつと前から抱いてゐた希望だつた。家で自分が一番末つ子として生れた故か、兄弟の愛に充分満足し又深く守られていたけ

ぎ、段々生長するにつれて或る一種の物足りなさを感じる様になつた。その理由は自分に可愛いゝ弟妹の恵まれないといふ事だつた。「お母様、家にはさうして赤ちやんがうまれないの」これも母を困らせたものだつた。でもそれだけに道端等で無心に遊んで居る幼児の姿を見る毎に、そこに何とも云へない一種の懐しみ、親しみが湧いて、飯事、鬼ごゝ等の終る迄靜にたゝずんで見てゐるのだつた。

以上の様に過して來た私の念願がきき入れられてか、いよゝ明日より正堂々ミ大好なく幼児の友ミなつて愉快に一日を過す事が出来るかと思ふ

ミ、何ミも云ひ様のない程の、嬉しくて又一面恥かしさを感じて、床に就いても愛くるしい幼児の姿や顔が目先にちらついて、いつもの如くすやゝミ眠にはつけなかつた。

明らかな幼稚園行の朝は開け放たれた。

純眞な神の如き幼児ミ一日を暮す。

これ程嬉しい大きい責任はない。さうぞその柔らかな心を亂さない様に心に祈りながら門をくぐる、ミ一步足をふみ入れるか入れないかミ同時に「先生お早うございます」ミ多くの可愛いゝ聲に迎へられて、私の様なものでも先生ミ云つてくれる幼児の無邪氣さには思はず頬の赤くなるのをさうする事も出来なかつた。そしてさうぞ困るしい先生なんて云はないで、姉さんミ云つてちようだいミ云ひたくなる。こうして雨の日も風の日も幼児の聲に迎へられ、日々本當に楽しく幼児ミ共に過して來た。

「先生ミ云はれる毎に苦しい様な又一面恥しい様な嬉しい様な複雑な氣持が千々に心を亂れさす。でもこの頃では「皆さんお早うございます」ミこちらから頭を撫でながら言へる様になつた事を大變嬉しく思つてゐる。

「先生いらつしやい、おまんじうが出來ました、はやゝの出來たてですよ」さいふ聲に取りまかれてその等の土饅頭を買つて歩く時の喜ばしさ、現實の苦しさも何もかもすつかり水の如く流れてしまつて、そこには只さわやかな氣分あるのみ。

又時ミしては「先生」さいふ三四人の聲がしたかと思ふミ、肩に腕に腰に多數の柔らかな手が身體を取り巻く「まあ、さうしませう。身體がつぶれてしまひさうだ」ミ思ひながらも、その重さ暑さなんかちつミも氣にならないばかりか、優しい手に取巻かれてゐる事を無上に嬉しく感じる。そして其處に日々伸びてゆく幼児の柔らかな心の芽生

えを感じ、今迄薄紙がかゝつてゐた様にぼんやりさしかわからなかつた幼児の姿が、日を経るに従つて一枚一枚剥ぐ様に明かに現はれて行くのに驚異の眼を見張りつゝも、日々これらの幼き者の友となつて楽しく過す事の出来る現在の身を強く／＼感謝し、感謝の中に送つて居ります。

## C 子

「始めて幼児の友となりて」

此の題が與へられた時に、私は本當に嬉しかつた。何故ならそれはすつこ以前から私の書きたいと思つてゐた事だし、又實習生活に入つてから尙一層それを切實に感ずる様になつたのである。あれも書きたい、これも書きたい。書きたい事は山程ある。

扱て、筆を執つてみては、たゞ行き詰つた。書けないのである。自分の思つてゐる半分も書き得ない。筆なごでは、とても現し得ない幼児への私のこの氣

持、始めて幼児の友に許されて實習に行つたあの日の思ひ出、胸が一ぱいになつて如何に書き表はしていゝのか。唯一口で云へば「感謝！」そのみである。この感謝の氣持をさういふ風に書き表はしていゝのか。私は先生からこの題を與へられたその時からすつこ考へて來たのであつた。いつも考へて居た。がさう／＼今日に至る迄結局何も書けなかつた。何も書けなかつた事は無かつたかも知れない。けれどその場のがれのあやふやな事を書くのは、幼児に對しても濟まない云ふ様な氣がして、遂に約束の期限も過ぎて今日になつてしまつた。この點いろ／＼先生にも御迷惑をおかけして本當に申譯け

ございませぬ。

\*

私が五歳の時であつた、妹が生れた。小さな可愛い、赤ン坊——幼いその頃の私はさんなにうれしかつたらう。いつも赤ン坊の側を離れないで枕許にキ

チンミ座つて、すやすや寝てゐる赤ン坊の顔をいつまでも／＼眺めてゐた。幼いながらも私の心の中に「これは私のたつた一人の赤ちゃん、私の可愛い妹なのだ」そんな氣持があつたらしい。可愛いくて／＼仕方がなかつた。

私はその五歳の時から繪本が好きであつた。「子供の友」さういふ本を毎月買つて戴いてゐたものだが、その本が来るに私は先づ妹の寝てゐるお部屋に持つて行つた。そして勿論その頃の私は字は讀めなかつたが、繪を見て妹にきかしてやつてゐるつもりで、大きな聲で繪を讀んだものである。赤ン坊——勿論幼児ではないが、その頃から私は所謂「小さき者」へ親しみを感じてゐたのである。

\*

始めて幼稚園へ實習に行く日。前の晩は、嬉しくて一睡も出来なかつた。遠い／＼彼方にある様な氣のしてゐた——あこがれ——幼児の世界を

この四月十一日から左記の方々が、女子高等師範學校保育  
實習科生として入學されました。

氏 名 出 身 學 校

齊藤保子	福島縣立會津高等女學校
井田淑子	新潟縣相川實科高等女學校
伊佐山靜子	京畿道仁川公立高等女學校
磯野泰子	和歌山縣立和歌山高等女學校
戸川貞子	東京府立第三高等女學校
大岡薫	東京府立第二高等女學校
川野留	東京府立第五高等女學校
川上須賀	東京府立第五高等女學校
田中秀子	東京府立第五高等女學校
田中ゆき	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
竹内喜美子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
谷川玲子	福岡縣門司高等女學校
工藤茂子	東京府立第五高等女學校
葛岡千枝子	東京市忍岡高等女學校
山中勝子	東京高等女學校
矢島八重	滋賀縣立天津高等女學校
矢田伊豆江	女子學習院高等科
松本菊野	神奈川縣鎌倉高等女學校
後藤富美子	東京府櫻蔭高等女學校
坂田美寶子	慶尚南道釜山公立高等女學校
北澤淑子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校
橋川ちゑ	東京精華高等女學校
鈴木貞子	愛知縣第一高等女學校
末光トミ子	大分縣立第一高等女學校

今日からいよく訪れて行くのである。たまらない喜び——其處には喜びあるのみで、不安も無かつた、心配も無かつた。何故なら、私は絶対に彼等を信じてゐたが故に。世のすべてが私を裏切つても、幼児——彼等こそは、彼等だけは私を見捨てはしない。——

何故私がこうした力強い確信を持つに至つたか——それは小さい時から共に生活して來た妹、妹への私の心、私への妹の心、その中に流れる或るあたかい何ものか——それによつて私の心は極く少しであつたかも知れないが、私の心は幼児の心、それになりきる事が出來た様な氣がしたのである。

一週に四日の實習生活——毎日毎日が希望であり、そして満足である。この一言で、私の實習生活のすべて、幼兒への私の感想を物語つて居ると思ふ。